

いわれなき感慨

正午に暇をひねり出して東単牌楼の本屋を見に行き、何冊か日本語の本を買った。月末になって欠給を取り戻したのは、まるでタダで持って行かれたような癪の種だったけれども、今はとも愉快である。その中に一冊、安倍能成の『山中雑記』ⁱがあり、五十一篇の論文集である。人物を記述したものは、正岡子規、夏目漱石、数藤、Köebel などの諸文は、皆面白く読んだが、旅行および山村の記述は最も興味を覚え、さらにいくつかの感慨を引き起こした。

みんなは旅行はとても愉快な事だと言ひ、人の紀行を読んでも確かにそう思われる。だがわれわれ中国にいる人間にとっては、そういう幸福は極めて少ないようである。わたしの以前の旅はみな避難逃亡のようで、（いわゆる實用主義の眼光で見れば、やはり一種の有益な訓練なのかもしれない）船上車上では盗難傷害を防がなければならないばかりか、旅館の中でさえ一刻として、心身の疲労を休めるゆつたりとした落ち着きがない。新式の新旅館から高粱杆のベッド黄河の小船宿に至るまで、わたしが泊まった所は一つとしてそうでないものはなかった。茶房や伙計に至ってはたいていが菜園子張青〔『水滸伝』の英雄の一人〕の徒弟のたぐいで、特に付き合いにくい。例えばでこぼこ泥まみれの道など、（だいたいが通州への国道のようだと思えばよい）金があつて自動車に乗ろうが、金がなくてテクテク歩こうが、結果は同じように不愉快で、同じように旅行の情趣というものが無い。日本はそこは大ちがいで、安倍の文章を読むとまったく彼の幸福が羨ましくなる。だが実はそれも当然の事であり、中国にはないだけのことなのである。

三年前西山で数ヶ月療養したことがある。これはわたしが過ごした唯一の山居生活である。街中と比べると、確かにずっと愉快であるが、何も特別な懐かしさがない所である。何株かの古い樹木以外には、中国のどこに住んでいても、第一に気に食わないのは食物がめちゃくちゃなことである。粥にしろ、豆腐青菜にしろ、清潔に作つてあれば、何でも食べられるのだが、中国では要するに何とも見た目が良くないし、それにどうしてもコックの気ⁱⁱが抜けないのはとても嫌らしい。こせこせしたのは山村の特色ではなく、清淡閑静のはずなのだが、中国では一方で古いこせつきを留めながら、もう一方では新しいものを添加する——糞土の牆と赤い煉瓦塀とである。みなさんご自分でご選択あれ。安倍は「山中雑記」の最後で言う。

「私はこの山が山上では今尚敵に肉食と妻帯とを禁じて居ることをせめて嬉しく思ふのである。私はこの山に来る者が、世間と同じく肉味を求め、軽暖を欲することなく、精進を守り、静寂を喜ばんこと、さうしてこの山の人々が山上に一個の修道院を作り、上り来る者に対して世間と別なる空気に触れしめんことを望む者である。日本の現在の趨勢は様々なる意味に於いて次第に静かなる世界を破壊しつつある。我等の如き貧生かかる世界の次第に求め難くなることを嘆きつつある。私は山の当事者が宿院を以て営利事業と為すことなく、長く静寂と黙想とを愛する者の為、恰当の場所を供せられんことを望むに堪へない。」

わたしはこの言葉に対して十分に同意する。——だが中国にはもともとどんな静寂な世界もないのだから、これも無駄話でしかない。

最後に、『山中雑記』を閉じた後、又第三の感慨が起きた。（わたしもこれが亡国の音である

ことは認める。) こうした文章を、われわれは書くことができない。才力に限られただけではなく、実は時勢にも迫られていて、こうした余裕がないのである。可哀想に、われわれはまだ華林、柳翼謀、曹慕管といった諸公の妙論を批評するのに懸命にならざるを得ず、まだここで恥も外聞もなく“二五が十”を力説しているのだから、どこに風月を談ずる暇があろう。われわれがよい文章を書けないのは、人であり、亦た天である、ああ。 民国十三年十二月十日。

※初出：1924年12月16日『京報副刊』第12号

i 『山中雑記』 安倍能成著 岩波書店大正十三年八月 342～343頁。

ii コックの気 コックの気が具体的にどういう様態を言うのか未詳。